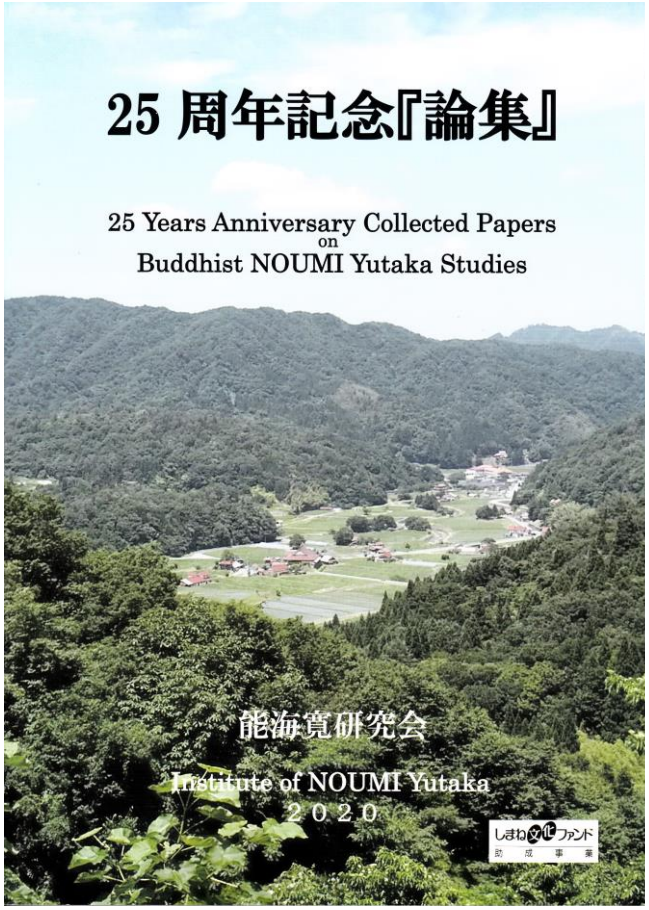
生涯を懸けた「新仏教徒運動」

タイトル	生涯を懸けた「新仏教史運動」
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会 25 周年記念『論集』
号	25 周年記念号
ページ	146－162
発行年	2020.7.1
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)



生涯を懸けた「新仏教徒」運動

隅　田　正　三

はじめに

能海寛は、明治元年 5 月 18 日、真宗大谷派浄蓮寺 13 世能海法幢。母ユクノの次男として誕生した。宗教者として船出したのは、明治 12 年 10 月に京都の本山で得度した時に始まる。明治 15 年 2 月から記述している『時教要授』(1)によると自身の宗教思想の発達過程を詳細に記録している。同年 12 月に、自坊の蔵書『大唐西域記』(2)を読み玄奘の仏教探検に感化され、この時から中国西域に関心を抱いた。

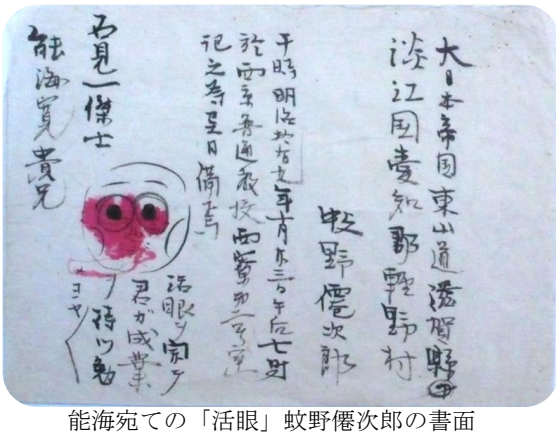
15 年 7 月より「石見学場」(3)夏期講習会において高度な宗教学を学ぶ機会を得た。16 年 7 月の夏期講習会では、九州から高塚和上師が来講され聴講した寛は、勉学への発奮を覚えた。自坊・檀家の学資支援により 18 年 9 月から広島教校で学んだ。同校は同年 12 月を以って京都・普通教校へ統合されることとなり 19 年 1 月に京都へ上京し、3 月より普通教校へ転入学した。

能海の自筆履歴書(学術)によると、『19 年 7 月より、吉谷覚寿に、「観心覚無抄」、「因明大疏」、「起信□記」。20 年 1 月より小永井小舟に、「文章軌範虫記」。20 年 2 月より小栗栖香頂に、「任侖経」。21 年より 3 年間、哲学館館外員となり哲学を学ぶ。21 年より 2 年間、梵・英語を学ぶ。』と記述している。吉谷師については、コレラで帰省中であった期間であるため石見学場での受講と思われる。能海の実践した「新仏教徒」運動を第一期(明治 21 年 4 月～32 年 2 月)と位置づけてみたい。

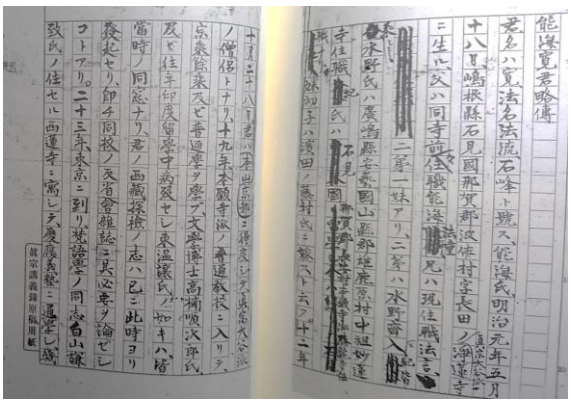
普通教校での「新仏教徒」運動

明治 18 年 4 月 18 日、京都西六條に普通教校が開校した。普通教校では、ボールドウイン、セッパード夫妻、松山松太郎、菊池龍太郎、和田義軌、手島春治、中川太郎などの英語教授陣が充実しており、英語力を高めていった。

19 年 3 月 5 日、普通教校へ入校した。東寮 3 号室で 4 名(垣山清、蚊野僊次郎、小池智覚、能海寛)が同室となった。同年 4 月には、校内で「反省有志会」が誕生した。能海寛は 5 月 29 日、「反省有志会員」(4)に、10 月 10 日には、「反省会永久会員」(5)となり、会務に参画した。10 月 23 日、同窓生 13 名が西寮二号室で将来の宿望を互いに発表し合った際に、能海は、チベット探検行を公言して友人らを驚かせた。学友の蚊野僊次郎が、この時の驚きの様子を「活眼」に著し能海に手渡した。



能海宛ての「活眼」蚊野僊次郎の書面


南條博士の「能海寛君略伝」自筆原稿(T6.2.16)

南條文雄も『能海寛遺稿』へ寄稿した原稿にも、「十九年、本願寺派普通教校ニ入リテ、宗乗餘乗及ビ普通学ヲ学ブ、文学博士高楠順次郎氏及ビ往年印度留学中病没セシ東温譲氏ノ如キハ、皆當時ノ同窓ナリ、君ノ西蔵探検ノ志ハ已ニ此時ヨリ発起セリ、即チ同校ノ反省会雑誌ニ其必要ヲ論ゼシコトアリ。」と記しているように、南條博士も能海が明治19年に発起したことを記している。

普通教校では、無二の親友直海玄祐と桜井義肇がいた。明治20年7月14日から摂津国吹田村の光徳寺・直海玄祐宅へ夏期旅行を兼ねて9月5日まで長期間寄留していた。この間に桜井宅へ直海も一緒に訪問している。この間の50数日間が新仏教徒運動の構想を練る重要な期間であったことが考えられる。

同年9月22日には、京都三條のクリスチァンボード書店で、『新約全書』(明治18年・北英国聖書会刊)を買い求め、英文で署名している。他宗教についても、研究を怠らなかったことが伺える。後の『世界に於ける仏教徒』の論考にも活かされたものである。

この頃は『弘法大師一代記』(6)を読み感化した時期でもあった。能海はオルコット著『仏教問答』(M14年刊)が海外で瞬く間に自国語に翻訳されたことで英語の発信力に注目した。そして、21年4月8日に仏教を英語で発信をするサークル「E.C.S」(英文会)47名を学内で組織した。

21年10月14日から『The Literature』No.1〜No.5、『New Scholar』No.6〜No.12、『NEW BUDDHIST』No.13〜No.28を、毎週日曜日に定期的に発行して「新仏教徒運動」を開始した。「文学」、「新学生」、「新仏教徒」とタイトルを改変したのは英文会の目的にあった。

E.C.Sの目的について「諸君は、仏陀の偉大な愛によって生まれた。総ての衆生と喜びを享受し、真理の樹から因果の果実を摘み取り、モラルの庭園で自ら美味を味わうために、ECSはそのような新仏教徒の目的を成功させるために組織したのだ。」と述べている。考えを表現することで大切なことは、「第一に書くこと、第二に話すことである。雄弁さより文章の方が利するところ大である。しゃべる人はその場限りである。著述はどこにでも飛んでゆく。」という。

英文会のシンボル印影

早くから、著述することに軸足を置き、「新仏教徒運動」を展開した。『NEW BUDDHIST』の目的は、英文の翻訳。ニュース。文化、教養。会員の文通は全て英文で著すとした。

英文会のメンバーは、梅田定、立花憲信、笠原松二郎、宮定一、島津正人、上田繁丸、吉田幹、堀千代丸、佐田仙吉、加藤堯壽、北川源太郎、荒木敏雄、久富米次郎、西原壮十郎、野上祐精、大原義渕、大橋敏、木村功丸、平尾、楠長丸、服部譲治、山田謙敬、池野、加藤俊治、小原要蔵、楢山、楢島、小池智覚、稗田雪崖、村上眠雷、川口友信、吉津知天、護城綱雄、金近、猪口林太郎、花房、大内恵明、堀辺、新田、品川、桜井義肇、松浦、清谷寛玄、岡崎香岳、平山寿海、綿谷均次郎、竹下、能海の48名の会員を有した。

22年1月に、大学林令が発令され、普通教校は文学寮となり、同年1月28日、能海は本科へ編入となった。

同年2月には、オルコットに随行してダルマパーラが来日した。暖かいスリランカから来

日したダルマパーラは、病気にかかり京都の公立病院へ入院した。反省会のメンバーである沢井洵(後の高楠順次郎)、秦千代丸、能海寛らが交代で看護し見舞った。能海が看護した期間は2月25日から3月5日までの9日間であったが、その際に、能海寛はダルマパーラと『NEW BUDDHIST』の発刊などを話し、仏教について意見交換を行った。その後の二人の活動を見ると『The Buddhist』の発刊や釈尊の聖地復興など互いが触発し合ったものと思われる。ダルマパーラは全快し5月13日に帰国し、オルコットは九州へと巡回した。

一方、能海は、文学寮を継続するための学資金欠乏で、3月15日、京都を離れ故郷へ向かった。

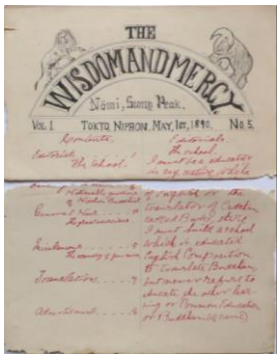
帰省した能海は、6月1日から石見学場の夏期講習会(長浜浄慶寺)へ4年ぶりに参加した。講習会では、尾張国・信力寺の住職海老原静観師(三等学師)から『佛説観無量寿経』本・末の集中講義(36日間)を受け、「智慧と慈悲」を学び採り、『Wisdom and Mercy』(7)と題するタイトルを編み出した。

また、『蛤浦小集』(M22年7月)に記録されている石見学場での学習記録によると、海老原師に「行信論」、武田行忠師に「教章来由」、「一念帰命」、「信願交際」、「正定滅度」、「信後報謝」、「王法仁義」、「本師本仏」等も同時に学んでいたことが判る。

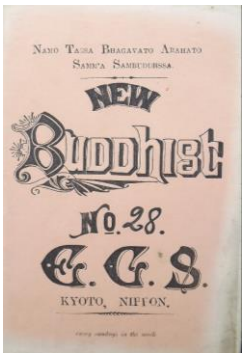
能海は9月上旬に、檀家総代と「学資金ニ付訂約書」を交し、向う4年半年の学資金270円の支援を取り付け、再び京都へと向かった。『NEW BUDDHIST』は、帰郷したため28号でストップしていたが、10月13日から再開して、31号まで発行した。

そして、英文会は、前田得念、河野始治の2名を後継者に指名して、バトンタッチを終え、文学寮は12月を以て退学し、東京で学ぶため12月17日、西依一六(8)、松島静寿と3名で上京し本郷区元町・白井花方へ下宿した。

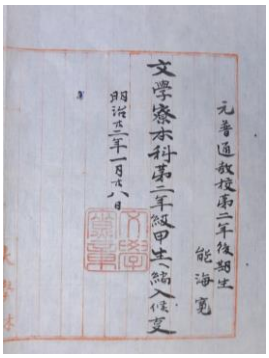
『蛤浦小集』



『Wisdom and Mercy』



『NEW BUDDHIST』



文学寮本科編入

慶応義塾での「新仏教徒」運動

23年1月5日、一足先に上京していた、古河勇、山中逸と再会して、松島と能海の4名で芝区三田四国町・田中きん方へ転宿した。能海は古河の文章力の高さに啓発された。日曜日毎に普通教校出身者が寄合、故普通教校、新文学寮、亜細亜の宝珠、海外宣教会、西本願寺、東本願寺、真宗、英文会、新仏教徒を論じた。

その結果、「青年会」を立てることを決め、月一度の集会をすること。取りまとめ人を古河勇とした。この時が「経緯同盟会」の発起人会であったと考えられる。1月13日、能海

は慶應義塾へ入学するため双書と履歴書を提出した。

そして、古河勇と下宿先を探した。1月19日、築地で松山松太郎氏の呼びかけで日本仏教青年会設立のため故普通教校出身者が集まった。その際に、今村恵猛、古河勇、弓削正雄、吉野、藤本、戸田、橘大心、小原要蔵、良浦、吉住、菊池謙譲、能海寛等によって「経緯同盟会」も一緒に誕生した。

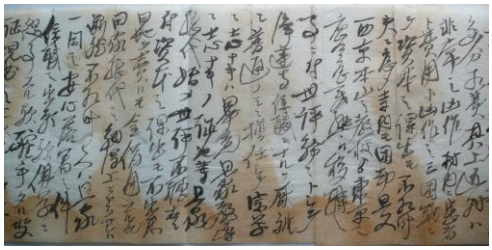
その後、頻繁に経緯会のことでの話し合いが行われた。この事が、後に「経緯会」(明治27年12月)誕生に繋がるものであった。

能海は、東京版の英文会(新仏教徒運動)を慶應義塾の4級生を中心に活動を開始した。メンバーは、平山寿海、竹下、綿谷均次郎、垣山清、清谷寛之、梅田定、笠原松次郎、橘大心、宮、川口友信、堀小三郎、上田繁丸、荒木敏雄、後藤弥九郎、佐治、吉田、加藤弘之、島津正人、久富米次郎、橋下倉之助、能海寛の21名。『Wisdom and Mercy』(智慧と慈悲)月刊(英文)機関誌(創刊号・1月29日)を発刊した。4月16日、『Wisdom and Mercy』No.4では、「宗教革命論」中西牛郎著を論説。「二河白道」英訳の取組などを掲載。

1月25日、能海は慶應義塾に近い、芝区三田豊岡町の龍源寺へ転居した。2月19日、古河勇が能海の元に転宿し2人は「木石書院」と名付け共同自炊生活が始まった。互いが触発仕合い[新仏教徒」を論じた。古河勇は、「自炊」(青年新聞へ寄稿)に2人を称して「天下の二大蟄龍が突然和合し」と記述している。知識を蓄え、いずれは天下に名だたる活動をすると予見しているようだ。2人の自炊生活も古河の都合により5月末で解消した。

6月1日、能海は、桑門環と2人で慶應義塾での知り合った白山謙致の西蓮寺へ転宿した。能海が転居したことにより西蓮寺は旧普通教校生の集会場と化した。そして、慶應義塾で『土曜会』の結成に関与することとなり、10月25日に会員数約30名(能海寛、白山謙致、梅原融、桑門環、吉野精順、菅学応、弓削俊澄など)で各宗派の僧侶が集まり、運動、スピーチ、作文等を行った。

慶応義塾の福沢諭吉は、アメリカ、イギリスから来日している著名人を迎え授業をさせた。能海は普通教校時代の英語漬けの学生生活で英語力を向上させていたが、より英語力を高めるためには外国人と生きた会話が出来ることを最大限生かし、イギリスから来日したE.アーノルド(詩人)と親交を深め、寛は、3月下旬の日曜日に2回、アーノルド卿の住まいする麻生赤坂今井町41の自宅を訪問して英語の指導を受けた。能海は、アーノルドへ京都の吉谷覚寿師を紹介した。又、イギリスのウォルター・ウェストン(宣教師・登山家) と慶応義塾でクライブ伝の授業を受け親交を深めた。登山について能海寛へいろいろと助言した。「春秋日記」でも「数々話したりき」と記述している。翌24年8月には能海が富士山登山を行なった。やはり、ウエストンからの助言を受け実行したものである。



父謙信よりの転学を勧める書簡

慶応義塾で勉学中の寛に義父謙信から郷里の檀信徒から「後住職となる証」が必要との書簡が届き、12月末の学期の区切りで、慶應義塾を退学した。

24年1月、義父からの要請と桑門至道氏の勧め

を受け入れ、哲学館へ転入学した。哲学館では、世界の宗教史を学ぶと共に井上円了より純正哲学を学び、2年間の蓄積で『純正哲学自解』という独自の論叢の基礎を固めた。内容は、「定義、考究法、知識論、物心論、唯理論、融通論、道義学＝知道、教育、心論。宗教学＝宗教学定義、他学との関係、宗教の定義、宗教学の考究分類。宗教論＝哲学、心論。比較宗教学。組織宗教学。」を論究し、半年後に出版した『世界に於ける仏教徒』の基礎が既に出来ていたことが判る。

釈尊降誕会を組織し「新仏教徒」運動

慶応義塾から哲学館へ転校したため、英文会の組織が機能しなくなり、新たに、英文会を発展させるために『釈尊降誕会』の誕生を、と25年3月18日から奔走した。3月23日の『春秋日記』を見ると「宣教会、文学寮、内学院大学寮、高中、尋中、南條文雄、井上円了、友人へ英文会の件で書面を出す。4月8日に「新仏教徒」が誕生することを祈る。」と記述している。そして、4月8日、「釈尊降誕会」が開催された。この時の状況の判るものが残っていないが、26年4月8日、に開催された「釈尊降誕会」は会計係の松田氏から能海寛宛てに会計報告が郵送されている。これを見ると降誕会が盛大に行われたことが次の決算書から読み取れる。神田錦町の錦輝館を会場に1,000人規模の催しだったことが判る。

明治26年4月27日付、「釈尊降誕会報告」　　松田光道→能海寛宛ての書簡より

〇収入の部

専心学校19円、哲学館9円45銭。井上圓了氏1円。奥田貫明師1円50銭。慶応義塾8円50銭。法学院3円。徳風会16円。南條師1円。島地師1円。村上師1円。寺田師1円。勝友会3円。哲学書院2円。都文館某10銭。合計69円55銭也。

〇支出の部

講義堂借受料6円。御国の光1,200部10円80銭。御厨子、香炉1円13銭5厘。音楽3円90銭。瓶、花、飾り2円60銭。特別券印刷費82銭。新聞広告(日本、読売、国民)3円21銭1厘。講師茶菓子71銭。錦輝館席料4円。同館払い色々4円82銭。菓子370個20円85銭。琵琶手謝礼3円。荷物運搬車40銭。紙代48銭。雑費7銭。郵税87銭。椅子破損料30銭。暖炉破損料45銭。合計64円41銭6厘。

差引残金　5円13銭4厘　寺田福寿師預け。

明治26年4月8日

(別紙)からは、哲学館関係の寄付金額と寄付者の名前が判る。

哲学館　1年級5円40銭5厘　2年級1円92銭　3年級2円40銭5厘　館主1円　合計10円45銭。右哲学館寄付致候也。各級細項は各級委員に就き置き下度候。

釈尊降誕会寄付人名(哲学館関係・能海寛とりまとめ分)

芳野、伊賀、中門、生駒、山本、松見、宮島、鷲尾、谷川、瀧本、太田、三宅、石田、新田、矢口、中川、植松、本多、山口、杉本、金山、大宮、能海、白河、上村、橋下、瓜田、井上圓了、関、安藤、田村、小田、関下。これらは、能海寛が直接寄付依頼をした人の名簿

と寄付金額が記載されている。

その後、30 年 4 月 8 日に開催された「釈尊降誕会」への参会者は、南條文雄、大内青巒、島地黙雷、村上専精、白山謙致、能海寛ら 13 名の記念写真が残っている。これらを総合的に考えると他宗派の重鎮と交流して親交を深めていることが判るのである。

『世界に於ける仏教徒』で「新仏教徒論」を発信

明治 23 年 10 月より、子安善義は南條博士の下で食客となり、梵学を研究していた。24 年 1 月から能海は、哲学館在学中に本郷町から、白山謙致は三田町から南條博の宅へ通いマクドネルの文典や大経の梵本を数年掛けて共に読み［大経」読了時に記念の写真を撮り、能海の帰郷に合わせて、三枚にそれぞれが自著して分け合った。この時が、明治 26 年 7 月 7 日である。大経のサンスクリット翻訳事業を成し遂げた。この功績は、あまり知られていないが、能海寛のサンスクリット翻訳の技量は、この時に蓄積されたのである。3 名は、「三伽会」(9)と名付けて仏典の翻訳完成後も交流を深めた。

能海、白山、子安(三伽会・M26.7.7)

哲学館卒業後、明治 26 年 7 月 21 日、出発、鎌倉、岡崎、名古屋、二見、京都、広島を経て 8 月 7 に浄蓮寺へ帰山した。途中、鎌倉(東部)と二見(西部)で全国仏教青年夏期講習会において、大内青巒師と二人で講演の席に望み、寛は、前座を務め「西蔵探検の必要」を熱弁して探検行の支援を求めた。西部仏教青年会事務局から東部事務所の礼状を添付して届き、一か月後に、講演の主催者から大内青巒宛ての礼状が大内氏から寛へ転送されてきた。大内氏が序文を書いてくれた関係性が理解できるのである。

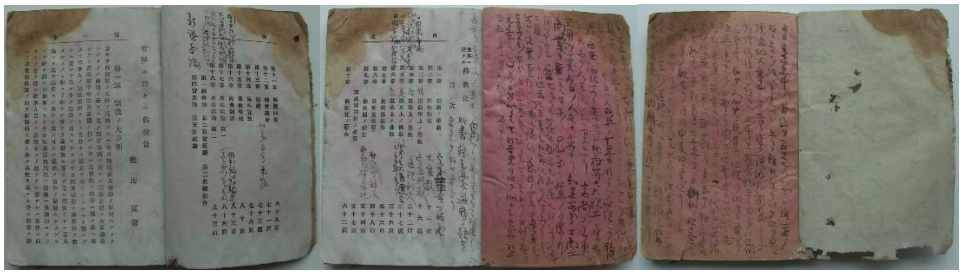
「世界に於ける仏教徒」は、明治 26 年 11 月に哲学書院で自費出版した能海寛著の論文である。(10)宗教の大革新、新仏教徒、宗教学上の仏教、哲学上の仏教、歴史上の仏教、道徳上の仏教(戒律論)、比較仏教学、サンスクリット(梵学)、仏教国の探検・西蔵国の探検の必要、仏教徒の連合、仏蹟回復、総会議所、巡礼、海外宣教、仏教学校、仏教翻訳、本山政論第一、本山政論第二、の全 18 章からなる。千部印刷され、全国の主要書店(68 箇所)でも販売された。

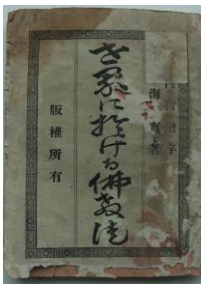
『大谷派本願寺事情聞書』は、明治初年から 10 数年間の大谷派本山の宗会議の顛末が議事録の形で記されている聞書である。能海は、これらの内容を熟知した上で本山政論を認め改革論を展開しているのである。

この論文が、チベット派遣僧の決定に大きく影響したことは既定の事実である。この本は当初「新仏教徒論」とタイトルに考えていたことから内容は、能海の目指す「宗教学」の確立を生涯の目標としていたことが読み取れる。

能海寛が『世界に於ける佛教徒』の書き込み記録を見ると、巡礼探検後に改訂版の発行を既に考えていたことが判る。目次欄に「情=宗教上の仏教。智=哲学上の仏教。美=歴史上の仏教。意=道徳上の仏教」、宗教革命の時至れり、梵学の将来、西蔵国探見萬記、因果争論、

仏教史、大乗非仏教論、大谷派本願寺問題等多数の項目を記載している。





『世界に於ける佛教徒』への書き込み

書き込み文章の中に「〇予カ安心タルヤコノ世界ヲ以テ心トシ世界社界百般ノ事ハ心現象ノ万事ナリ。名誉ノ遠ク及ノハ光明ナリ。信用アリ尊崇セルハハ智徳ナリ。此書将来佛教□勢の預言者タルヲ得バ幸セナリ」と記している。

これらは、著書出版後、自坊で「口代」を記した 27 年 1 月～2 月頃と考えられる。

「口代」に見る探検決意

哲学館を卒業して、半年経った明治 27 年 1 月 3 日、能海は自坊で家族にチベット行の想いを責だらに打ち明けて、自らは「口代」と表する和綴じ本へ 14 項目を記述し、2 月 27 日には、自髪を一掴み和紙に包んで「口代」に次の文面を書き添え置いた。

「明治 27 年 2 月 27 日、剪髪其毛ヲバ後ノタメニ紙ニツツミ箱ニ入レ置キ、予無事帰国セバ吉祥也若シ業ノタメニ死セバ、遺体ト思イ御葬送ヲ仕乞ウ。」

本文 14 項目(11)の内 1・2・7 項目は、

1．西蔵国探検の必要は拙著中に大略論ずる如し、依って、これを略す。而して、予は、その蔵国探検を思い立ち候に付為に意を書に顕すべし。

2．予は、全く名利の為にあらず。愛国護法の精神よりして、この決心をなす。由て、一つは国家の為にして、一つは、仏法の為なり。この二大義務は成年にあらずしては、容易に成し得られず。由て、通じて国の為、法の為に為す。予の一生中の業は、只、この一事にして、その後に於けるは、一地方、一区域に限る国の為、法の為に尽力致す考えなり。

7. 予は、平素深く思うは、当山の住職たる身分は実に兄上なり。予なかりせば、必ず兄の学問に出て、後住たるや明らかなり。しかるに、ここに兄は余り出家を喜ばず、所に、予は是非学をなしたきより独行にて、予のためたる金をなげうち上京、学問せり。而して、父は、予の志を見て加勢せられ学問なしつつありき所に、明治 22 年秋、再び学問の為、出でたきより、遂に予は固より、その後、僧となるの覚悟なり。しかれども、兄も学問に出でたまわれば必ずや住職たる事を得る人なり。然るに、兄も、予を後継たらしめんたまえども、予は、予の弟たる義務を以ても、一応、兄の当寺の世話をせられて兄より譲り受けるの精神なり。仮令い何年立つも、この順序を経ずは、予は、譲りうけざるなり。故に、本山の表住職の所は、父上の名前にしても、実地の寺の世話をば一応譲られたまうこそ至当なり。法界師の真の孫にして、且つ、長男なりゆえに、予不在の間は、寺の世話は兄へ致さしめたまうこと偏に希望致候也。

と目的、兄を想う気づかいについても記述している。

能海は、19年にチベット探検を表明して、サンスクリット語を学習し、英語翻訳を目指していた。そして、笠原研寿、東温譲らの渡航によってサンスクリット経典の将来を期待していた。しかし、頼みとしていた二人は共に病魔に倒れたため、24年8月、富士山登山以降に自らがチベット探検に行くことを決断した。

「予と西蔵」(M30.5.9記)によると、

(一) 明治二十一年東温譲印度留学ノ為出発其送別会ニ於テ入蔵ノ必要ヲ述ベテ彼レノ行ヲ送るル。

(二) 明治二十五年十二月(夜)自身入蔵ノ任ニ當ラント決ス。是ヨリ先キ廿四年一月以来南條師ヨリ少シヅツ梵語を学ブ

と記録している。また、人類学上の見地から西蔵研究を行いたいとしている。

西蔵派遣僧上申と「白川問題」について

明治 27 年春に能海は自ら企画したチベット派遣僧支援への上申書を本山へ提出するために京都へ上京した。同年7月5日付、郷里の石田喜三郎からの書簡の宛先が京都東中筋花屋町下ル片山方とある。この時点で既に能海は在京していることが伺える。本山役員の桑門至道や梅原融を伝手に本山へ派遣僧の上申を試みていた。しかし、同年7月25日に日清戦争が勃発したため念願が先送りとなった。止む無く、9月に帰郷することとなった。

その後、南條博士からチベット探検行までの期間、梵語の研究と書生として寄留するよう勧められ29年3月上旬に上京した。

二度目の本山申請書は、明治29年5月7日付、嘆願書に入蔵予定、履歴書を添付して本山執事渥美契縁宛てに申請した。添付の入蔵予定によると、

第1　方法　先ず清国に渡り凡そ1年滞在し西蔵に関する参考書を求め、又入蔵の手順を正し、同伴者を求め喇嘛僧と成り、商隊に混して、進蔵す準備致す目算に御座候。

第2　順路　先ず清国北京に着し、凡そ1ヶ年の後、四川省に入り、夫より打箭炉、察木多等を通過して前蔵、後蔵の首府に到着する予定の段に御座候。

第3　年限　凡そ往復及び滞蔵合計5年の予定に御座候。

第4　目的　地理、国体、仏教、言語、経典、仏具等の研究を主眼に致し居り候。

第5　入費　渡清100円、在清150円、参考書100円、入蔵100円、帰途150円、合計600円。

と綿密な計画が記されている。

そのような中、またもや問題が発生した。それは、「白川問題」である。

「白川問題」は、本山の渥美契縁派と改革派の清沢満之の間で、改革論で論争が起こった。改革派は、京都白川村に「教界時言社」(12)を設立して、明治29年10月30日に『教界時言』創刊号を発刊して広報活動を展開した。

この改革派は、白川派と称された。翌30年1月29日、渥美契縁は、執事を失脚した。本山「白川問題」が過激の最中、弟の斉入からの書簡での問い合わせにも、寛は、中立的な立場

を貫いたのは、チベットへ向けた大きな夢の目的達成の為であった。

能海のチベット行を積極的に支援していた石川舜台が復権して、その後、海外への派遣事業を推進して行った。

一方、帰詠舎に通い中国語の学習や図書館に通い情報蓄積、宇都宮氏、神保小虎氏、坪井正五郎氏、稲垣氏を訪問し、地学協会例会へも出席した。

経緯会で「新仏教徒」運動

明治 27 年 12 月、仏教青年会の会員であった古河勇、杉村廣太郎、菊池謙譲、西依一六、大久保格、北条太洋が結成した会が経緯会(28 名)である。古河勇は当時、帝大選科生で、明治 26 年から『仏教』誌の記者として活躍していた。能海は、26 番目の会員として登録されている。経緯会の会則には「１.本會は学術宗教等の重要なる問題を攻究し、智識を研磨し、徳性を養成するを目的とする。」、「２.會員は佛教徒にして講話し得るものに限る」とあり、学術と人格の修養を目標とする懇話会として出発したが、28 年 1 月、98 号より『仏教』誌を、その準機関誌とすると仏教界の意見番の役目を果たした。

その後、古河の病気療養により、北條大洋が代表を務めた。29 年 3 月に南條博士の誘いで上京した能海は、経緯会へ参画した。その北条大洋も外交官として、30 年 6 月 18 日、渡航したため、西依一六が代表を務めた。西依一六と能海寛が中心となり「経緯会」を「経緯同盟会」(13)とし、会是、会員誓約書を作り、8 月 19 日、白蓮社で「経緯会会是委員会」、続いて、「臨時会」を開催し、立て直しを図った。通称を「経緯会」とした。能海の記録によると、その時の会員数は号外を入れて 41 名であった。

１北条太洋、２古賀新、３杉村廣太郎、４海野詮教、５境野哲海、６西依金二郎、７田上為吉、８菊池謙譲、９小林正盛、10 月見覚了、11 渡邊海旭、12 山口力麿、13 柏原文太郎、14 古河勇、15 大久保格、16 葦原雅亮、17 伊澤道暉、18 吉田友吉、19 本多澄雲、20 梶宝順、21 花田凌雲、22 梅原融、23 桜井義肇、24 菅学応、25 清川圓誠、26 能海寛、27 田島擔、28 金義鑑、29 中島裁之、30 木山安生、31 菅真海、32 妻木直良、33 佐々木恵璋、34 梅田謙敬、35 旭野慧憲、36 重田友介、37 鈴木貞太郎、38 高楠順次郎、39 古田復之、40 安藤弘、号外大宮孝潤。

この 41 名の会員中の 11 名(北条太洋、菊池謙譲、能海寛、田嶋擔、中島裁之、菅眞海、重田友助、鈴木貞太郎、高楠順次郎、古田復之、大宮孝潤)が海外に出て活動した人であった。

雑誌『仏教』は、明治 18 年 9 月『能潤会雑誌』として創刊され、21 年 7 月に『能潤新報』、明治 22 年 2 月梶宝順が引き継いで『仏教』と改名している。堀内静宇、加藤熊一郎（咄堂）らが記者を勤めた後、明治２６年に古河老川が記者となる。それまでも数少ない通仏教的な雑誌であったが、古河が記者になったあとは、さらに進歩的な雑誌となり厳しい教界批評で知られるようになる。古河が病で東京を離れると、北条太洋が主筆となった。その北条も外交官として洋行するため、西依一六（別名、小崎庄次郎）が主筆を継ぎ、さらに西依の後は境野哲海（黄洋）が主筆となった。なお、経緯会の会員はすべて番号を割り当てられ、「第三経緯子」といった筆名で『仏教』誌に寄稿することもあった。『吾が徒』27 号に会員名簿が掲載されている。

普通教校＝文学寮関係では、大久保格、梅原融、桜井義肇、能海寛などの名前があり、白川党では月見覚了、清川円誠がいる。この会がいったん解散するのは明治 32 年 2 月である。全会一致で解散を決定したが、その時、近角常観も会員であった。その後の明治 32 年 11 月、まったくのクラブとして復活している。

31 年 3 月 4 日、西依一六の送別会を開いた。能海は経緯会の運営を友人の境野哲海ら 2 名(安藤弘？)を指名して、運営をゆだねた。その能海も 4 月 17 日の経緯会例会を最後にチベット探検の準備と結婚のため帰郷した。

31 年 11 月に、能海がチベット探検に旅立ったあとは、経緯会は求心力を失い 32 年 2 月に一旦は解散となる。高島米峰、渡辺海旭、安藤弘、境野黄洋、杉村縦横らによって。第二期・新仏教徒運動となる「仏教清徒同志会」へと伸展していった。

崇高な教育理念

帰郷したならば、「田まで書き込み、長田、波佐の地図を製したい。石見大教校は、漢籍、仏学、英学、普通学、作文を、小学生 100 人、普通生（高等小学 100 人、中学 100 人)仏学生 50 人」と 350 人程度の全寮制の学校建設計画を記している。

28 年 1 月、「波佐倶楽部」は、能海寛が郷里の檀家より学資金によって修学したことによる檀家の子息への貢献を含めて、地域の青年等に得た知識を享受したい気持で立ち上げた組織で、自ら事務局を担当して、禁酒運動、倹約貯金を推奨し、世界地誌の勉強、地方史の編纂を手掛けた。

石見大教校設置は、地元での支援が必要である。「波佐倶楽部」は、国際化を見据えたもので、将来、海外からの仏教留学生の受入の布石をも考えてのものであった。

寛は、里の浄蓮寺の改革案を次のように述べている。

「土蔵を建て宝物、書籍等を納め火事の為を防ぐ。」このように天頂山ニュービルディングの素案がこの時に考えていたことが判るのである。実際に土蔵が完成し、寛が探検出発前に纏めた『浄蓮寺蔵書目録』の函記号によると 10 種類（宗乗、餘乗、漢籍、国典、宗乗末書、雑書及勧化書、当用書、附御堂用書、石峰文庫、別函文庫略の部）に分類し、天、玄、黄、地、宇、宙、龍、蔵、イロハ、壱弐三四五、という函符号で約 30 箱に 2 千冊の書籍を蔵の 2 階に納めて出発したのである。

日本・中国の歴史書、孟子・孔子の書物、論語、大唐西域記、輿地誌略、日本外史、萬国輿地全図などあらゆる書物に目をとおした。

この結果、佛教は元より、歴史、民俗、地理に精通して、未来を予見する能力をも醸成して行った。能海寛の通読した書物を精査することで、能海寛の思想の発達段階の解明ができる。しかも、2,000 冊の蔵書を整理・分類・リスト目録の書き上げを 13 日間で完成させたことは、パソコンに依存している今日とは比較にならない程の出来ばえであった。

能海の西蔵行に向けての国内での諸準備は、1.「蔵行紀程全」(M26.7 写)、2.「進蔵紀程全」(26.7 写)、3.「西蔵路程地図(八枚続き)」(26.春抄写)、4.「西蔵通行地図二線(一枚)」(26.春抄写)、5.「西蔵文典全」(29.4 写)、6.「西蔵語会話編」(29.6 写)、7.「入蔵者氏名及年代

経過地表」(29.7 調製)、8.「西蔵学図書目録」(29.7 調製)、9.「西蔵学雑録」(29.4 以降)と記録しているものからも伺える。

また、手掛けた文稿は、1.「常州稲田及板敷山(紀行)」(反省会雑誌・M23.9)、2.「西蔵探検の必要」(天則・26.7)、3.「世界に於ける佛教徒」(哲学書院・26.11)、 4.「岡本十八郎君を吊う」(「楓葉」・23.5)、5.「予の四月六日」(反省会雑誌・29.4)、6.「西蔵国歴史年表」(仏教雑誌・29.6)、7.「西蔵国の分派九宗」(訳編)(反省会雑誌・29.7)、8.「宗教学の必要」(東洋哲学雑誌・30.5)、9.「ツヲンクハパの伝」(東洋哲学雑誌・30.6)、10.「東洋学に就いて」(東洋哲学雑誌・30.7)、11.「西蔵国所伝釈尊入滅考異説(訳)」(仏教雑誌・30.7)、12.「西蔵国問題」(太平洋評論・30.8)、13.「漢学と支那語」(東洋哲学・30.8)、14.「西蔵国歴史年表(完・訳)」(仏教雑誌・30.8)、15.「苦薬逆諫」(仏教雑誌・31.2)がある。これらの寄稿文の中には、天頂山曇毬、天頂山など能海寛のペンネームで著しているものもある。

寛は、里の浄蓮寺の改革案を次のように述べている。「後口（庫裏）の納屋の所へ竹藪中へ出しめ上り小野原谷、大井谷、郷の見ゆる家を建て、又は薬師山の所・・・」、「土蔵を建て宝物、書籍等を納め火事の為を防ぐ。」このように天頂山ニュービルディングの素案が、この時に考えていたことが判るのである。実際に土蔵が完成し、寛が探検出発前に纏めた『浄蓮寺蔵書目録』の函記号によると 10 種類（宗乗、餘乗、漢籍、国典、宗乗末書、雑書及勧化書、当用書、附御堂用書、石峰文庫、別函文庫略の部）に分類し、天、玄、黄、地、宇、宙、龍、蔵、イロハ、壱弐三四五、という函符号で約 30 箱に 2 千冊の書籍を蔵の 2 階に納めて出発したのである。

「波佐史私考(中世史)」が完成したのは、能海寛がチベット探検へ出発する直前の明治３１年 9 月 30 日であった。能海は村内の各家庭や社寺から古文書を借り受け中世史の編纂の大事業をおこなったのである。後継者として、友人の小林久太郎氏が受け継ぎ、明治・大正・昭和初期の歴史を書きとめた。これらが、今日の地方史研究の基礎となっている。

チベット派遣僧としての旅立ち

6 月 29 日、郷里で華燭の典をあげた。「本堂の縁側で、妻静子に習字の手習いを仲睦まじく教えていた。」と姪の桃枝氏が生前(昭和 49 年頃)話してくれた。新婚生活 3 カ月目、9 月２７日に本山からチベット派遣僧として正式の内定書が届いた。

10 月 4 日、早朝に地区檀家の人々が見送りに駆けつけた。静子夫人は、県境の馬の原(広島県北広島町)まで、付き添って見送った。

7 日、本山へ出向き、「今回西蔵国探検の目的を以て、清国へ渡航内定」通知を差出す。13 日、西蔵探検見込書(目的、通路、西蔵、源五、年限、費目)、履歴を編纂した。

大谷法主から次の文面の親書を受ける。

謹　上　西蔵達賴喇嘛教主獅座下

大日本本願寺法主大谷光瑩啓

西蔵達賴喇嘛教主獅座下恭維教祺安吉福寿円満曷勝額慶西蔵自

古仏教盛行風俗淳僕唯因山河遼遠交通不便未曾聞有敝邦人到境観

光者洵為可憾本寺茲遣派能海寛親問教主安好并究教法之源流考経
文之異同□員始到貴境未通人情風俗而探教求経之業固非容易如蒙
茲航指導保護遠人俾伊得窺一班則不啻本寺之幸實斯教之幸也粛此
佈懇并請崇安統希慈照不戩

大日本本願寺

法主　大 谷 光 瑩　　印

大日本明治三十一年十月十五日

本山から進展の沙汰が無い中で、渡航申請手続き、外務省へ出向き、特別保護の依頼などを進めていた。11 月 6 日、南條博士や友人へ渡航の挨拶のため上京した。9 日、神田淡路町の宝亭にて送別会が行われた。

この時に参会した人達は、安藤弘、境野哲海、田中治六、三石賤夫、三島中洲、梶宝順、渡辺海旭、海野詮教、梅原融、桜井義肇、秦敏之、杣村慶太郎、近角常観、宝閣善教、古田復之、南條先生、高嶋大円の 17 名であった。京都の普通教校、文学寮、哲学館、反省会、経緯会、詠帰舎を通しての友人たちであった。

南條博士からは、蔵𤍠と千金丹、感応丸、宝寿などの薬など 71 包。西蔵探検に必要な辞書などが手渡された。

11 月 10 日、東京を発ち、翌 11 日、京都に着くと本山へ向かい、法主に拝謁し東京往復旅費 10 円 78 銭、並びに 西蔵探検費千円の内、3 分の 1 の 370 円（重慶５カ月滞在費）とダライ・ラマ 13 世宛の親書と旅券を授かり、神戸に向かった。

同年 11 月 12 日、神戸港から西京丸(2,913 トン・船長コンナー氏)にて門司、長崎を経由して上海へと向かった。

この時、能海は西蔵探検に、他に上海学校教員(松原)、杭州、旅順、南京への学資師補留学生(長谷川、川那辺、藤分、山本、村上、一柳、樋口、鈴木、九谷)が本山から海外へ派遣されたのである。

聖地巡礼と仏教探検

謹上　西蔵達頼喇嘛教主獅座下あて大日本本願寺法主大谷光瑩啓教法の親書には、「本寺茲遣派能海寛親問教主安好并究教法之源流考、経文の異同（相違)、人情・風俗の探求の為に指導保護を懇請」している。

能海寛は、ダライ・ラマ 13 世宛て親書を携え、明治 32 年 1 月 8 日重慶に上陸して日本領事館を拠点にして出発まで毎日、午前中は中国語の学習に、午後は体力維持のため散歩かたがた運動のため市街地を巡る。本山 の上申書も定期的に発送している様子も記述されている。

寛の西蔵探検行は、目的は一つ、のみではなかった。仏教聖地の巡礼であった。峩眉山登山が正に、聖地巡 礼と言えよう。『世界に於ける佛教徒』第 13 章巡礼、では「宗教上において、教祖の遺徳を追慕し、その霊場を巡拝すること……。」が、巡礼だと述べている。

「在渝日記」は、M32 年・第 2 次探検紀行記で、日記の中には、中国の高僧４名(玄奘三蔵、南山道宣律師、慈恩大師、義淨三蔵)の業績と略歴を詳細に記している。

能海寛の中国大陸での2年半年の行動は、巡礼探検であった。峨眉山登頂、途中の大僧院は全て訪問、著明な寺院の方丈との面談、寺宝の複写、仏典・仏具の購入、拓本の購入、仏像の模写、高僧の聖地巡拝、回教徒地区の巡礼、紀行文や地図を書く。などは、他の探検家とは一線を画すものである。

能海寛が賞賛した「干殊爾」は、「甘珠爾」と同じで、「丹殊爾」は、「丹珠爾」のことでる。「テンギュル」（丹珠爾）とは、「チベット大蔵経」の論部を構成する部分で、二つの部分から成り立っている。一部は、「カンギュル」（甘珠爾）で、釈迦牟尼の説いた教典で、仏教の教義と戒律を説いたもの。三蔵の「経」と「律」に相当する。二部は、丹珠爾で、甘珠爾に対する注釈と三蔵の「論」に相当する。

チベット大蔵経は、8世紀末以後、主にサンスクリット語仏典をチベット語に訳出して編纂されたチベット仏教経典が、集成されたものである。

将来品の経典と翻訳

仏典の翻訳は、「般若心経」、「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」、「西蔵ボン教」などを梵語、西蔵語、中国語、英語に対訳照訳を短期間で実行した。このことは、寛が日本において周到に語学研究をしていた賜と考えられる。また、寛は西蔵草隷書き及び「干殊爾」、「丹殊爾」の翻訳経西蔵を目の当りにして西蔵の文化水準の高さを正しく評価している。

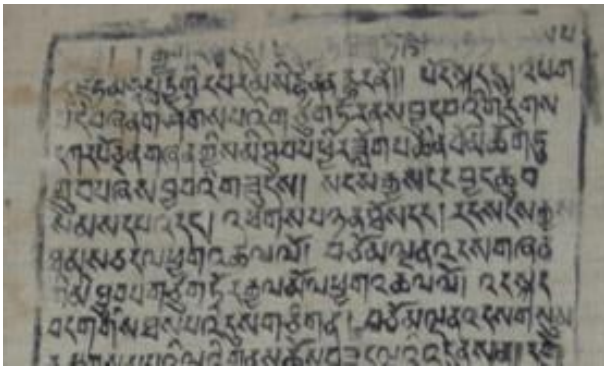
「西蔵語ボン教の無量寿経」は、明治33年4月25日に邦人として最初にボン教を翻訳したものである。

ボン教について寛が次のように記述している。「ヂエナバルは、ボン教の主神にして、黒色にして女の相好。一見、緑達拉の形に似る。又古来、西蔵国の鬼神を祭る。コロヲバは刺麻教に反して外に転回す。これ白教もとめ、これを後、刺麻教入りて改めたり。又釈尊をも説く。

古来まで釈迦ありと。ボン教の開山の名なく、具さには蔵衛、中部西蔵、恐らくは、支那老子と同じなり。」という。

経典の将来は、「金剛経」(M33.1.15入手・2.18翻訳完成)、「般若心経」(M33.3.26翻訳完成)、「弥勒菩薩誓願経」(M33.3.31直訳完成)、「無量寿経」(西蔵ボン教・M33.4.25翻訳完了)、これらの経典は、第19回本山上申書(M33.5.16)によると南條博士宛てに西蔵翻訳の4経典が送付された。

明治16年に、恩師南條博士がオックスフォード大学で梵文写本と漢訳写本の対校研究、英訳したものを漢訳仏典の目録『大明三蔵聖教目録』を英訳出版した。その内容に「無量寿経」、「阿弥陀経」、「金剛経」、「金剛般若経」、「般若心経」などがある。能海は、これらの原本を入手して、約束通り、博士の元へ届けたいと考えたものと推測できる。後に刊行された『ケルン・南條本』にも大きく影響を与えたものと考えられる。



「大白傘蓋陀羅尼経」の一部分

また能海が将来した各種経典・仏像・仏具・拓本などについては、能海自身が取捨選択をして、限られた手持ち資金の中

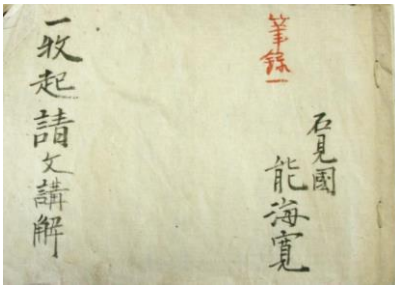
で必要と判断して請来したものであるから、必ずや選択の意図があるはずである。

この点からも詳細な再調査が求められる。何気なく見過ごす将来品の中にも麻製長尺織物にチベット語で木版印刷された「大白傘蓋陀羅尼経（だいびゃくさんがいだらにきょう）」がある。これは麻織物で、幅 31.5cm、長さ 866cm に 8 枚の経文が刷り込まれている。また「ルンタ」(風の馬)なども蒐集している。

2 年間の巡礼探検中に、自身の行動して来た思想の過程を要約したものに「思想の変遷」(14)（学問に付きて）が残されている。明治 33 年 12 月 22 日に記述したものである。

「1. 学問ハ何ノ為ニ学ブベキモノヤ　2. 普通学ノ必要　3. 欧米布教策　4. 英文研究時代　5. 翻訳ニハ梵学ノ必要ヲ感ジタルコト　6. 梵文経典ノ不足ヲ感ゼシ時代　7. 自動的東洋学研究の必要　8. 西蔵行の感念　9. 西蔵学ノ必要。」の 9 項目で西蔵文の必要を結論付けている。

「諭達」(15)によると「天頂山法典第一典」を「浄蓮寺師壇規約十ケ條」、「天頂山法典第二典」を「浄蓮寺波佐教会規約八ケ條」とし、2 法典の実行を希望していることを述べている。2 つの法典は弟の水野斉入あてに送付したと記している。浄蓮寺波佐教会規約の第四条により、「教会結社規約」を設け、寛自身が住職を拝命したことによって、300 年間代々続いた住職の規定する範例をもって規約の制定をして明文化して置きたいとの意向である。この事は、世の中の道徳が大いに衰退していることを危惧しているからであった。このことは、法然の「一枚起請文」(16)から学んだと考えられる。



筆録 1「一枚起請文講解」M18.9.28 記

旅行中に「西蔵研究倶楽部」の草案の中に次の記述がある。

文部省は留学生を出して研究せしめるべし。1. 留学生は、日本僧を出すべし。2. 其選定は予に一任すべし。3. 留学生は、蒙古に 2 名、青海に 1 名、西蔵に 3 名、北京に 1 名、印度に 1 名、ニポールに 1 名、日本 1 名。計 10 名。経費　1 人に付　1 年 120 円、1,200 円。継続 5 ケ年、6,000 円。外　旅費　1 人に付　往復 400 円　計 4,000 円。書籍買入　経文　2,000 円。雑費 1,000 円　計 3,000 円。雑費 2,000 円。計 15,000 円也。

1. 西蔵人を雇入れること
2. ラ(マ)寺を建てること
3. 西蔵経文類の翻訳のこと
4. 蔵研究のことを報告し、訳書出版のこと

帰国したら直ぐに取り組む考えを著したもので、本格的な仏典翻訳を組織的に始めたいと考えたものである。

「不惜身命」の境地

「今ヤ極メテ僅少ナル金力ヲ以テ深ク内地ニ入ラントス、歩一歩難ヲ加エ、前途気遣ハシキ次第ナレド、千難万障ハ勿論、無二ノ生命ヲモ既ニ仏陀ニ托シ、此ニ雲南ヲ西北ニ去ル覚悟ナリ。」と、本山寺務所教学部長谷了然師宛の文面を見ると覚悟の程が伺える。

ダルツェンドに半年間滞在して、西蔵大蔵経典を入手して五巻の経典を翻訳して、英訳経典完成への糸口が出来て探検の目的の大半は達成した後も、第二次、第三次探検へと向かったのは、チベット国の仏教開国と釈迦直伝の『仏説観無量寿経』のサンスクリット語経典、西蔵語大蔵経典の有無を探索し入手、英訳経典を世に出すことが最終の目的であった宗教学の集大成であることが、この文章から読み取れるのである。

能海は、「新仏教徒」運動と「宗教学」の集大成を生涯に懸けて実践した人物であった。自ら釈尊の弟子、命は授かったものと求道の精神で生涯を宗教学に捧げた。

特に、釈尊直伝に近いサンスクリット経典による英訳経典を世に出し仏教全般のバイブル経典となすことを考えて行動したものである。

宗教経典全書目録　　能海寛編輯

猶　太　教	旧約聖書
基　督　教	新約聖書
回　々　教	コーラン
佛　　教　　天台、日蓮	法華経外二経
同　　浄土、真宗	三部経
同　　大日経、□経	般若心経、金剛経
同	日比婆抄論、具舎論、三大部等
同　　ラマ教	各宗祖□立教開霊教
儒　　教	四書、五経
道　　教	老子、荘子等
神　　道	古事記、各派祖書
婆羅門教	吠陁経　全部
ゾロアスター教(拝火教)	ゼンドアベスター

能海寛の生き方に学ぶ

人間の生き方や人生観は、それぞれ個々の身の処し方である。能海寛という人物は、たぐいまれな人であったとしても、人生僅か33年間の境涯において、一生涯を求法の為に終始一貫、貫く姿勢は、何分の一かでも見習いたいものだ。

あらゆる会を組織するコミュニケーション能力の高さ、一世紀先をも、見通す能海の先見性は、深い洞察力の上に成り立つ直観性(インスプレーション)と実行力によるものである。

先ず、手を挙げて、自分の考えを公表し、用意周到にじっくり腰を落ち着けて、機が熟せば、熟慮断行する決断力は、見習うべきものがある。　　(能海寛研究会事務局長)

注

(1).「時教要授」は、父法幢の里、専光寺において、明治 15 年 2 月 21 日、新調したものを同年 10 月 19 日に浄蓮寺で、増補し、更に 27 年 3 月 7 日に、増補した説教(法話)の記録。「時教要授録巻四」(M16.8.4)も残っている。

(2).「大唐西域記」(承応 2 年(1653)刊・浄蓮寺蔵書)玄奘の西域インド旅行記。12 巻。645 年に経典を携え帰国。仏跡、風俗、生活などを編述したもの。

(3).「石見学場」は、石東組(石見地方東部)の真宗大谷派の各寺院(明清寺、浄慶寺、正楽寺、善徳寺など 6 カ寺)を会場に、毎年夏期講習会を開催した。

(4).「反省会有志会」は、明治 19 年 4 月 6 日、普通教校内の学生と教員 18 名で結成された禁酒運動を推進する組織。当初は、反省会有志会であった。能海は、5 月 25 日に入会(会員番号 83 号)した。普通教校は 6 月にコレラが発生して学校閉鎖となり 9 月に再開された。

(5).「反省会永久会員」は、明治 19 年 9 月に学校再開後、正式名称が反省会となった。10 月 10 日、能海は反省会永久会員になるために誓約書を書き宣誓した。

(6).「弘法大師一代記」(明治 21 年 1 月刊)を能海が読み感化され、同年 4 月 8 日に、英文会を組織し、同年 10 月 14 日から、英文の週刊誌『The Literature』を発行した。

(7).「Wisdom and Mercy」は、「智慧と慈悲」という月刊誌のタイトルである。明治 22 年 6 月、7 月に郷里の石見学場において、「仏説観無量寿経」(海老原静観師)の集中特講(40 日間)を受け、「Wisdom and Mercy」を翌 23 年 1 月より採用したものである。『New Buddhist』(新仏教徒)No.未記入分に、「Wisdom and Mercy」のタイトル草案が太鼓橋にライオンと像を描きデザインしたものが書き残されている。

(8).西依一六は、金次郎、小崎庄次郎の別名を持つ。普通教校以来能海寛と活動を共にした。

(9).「『三伽会』～能海、子安、白山のこと～」(機関誌『石峰』第 17 号・20112.3.15)

(10).『世界に於ける佛教徒』(明治 26 年 11 月・哲学書院刊)は、当初、タイトルを「新仏教徒」とする考えでいた。1,000 冊印刷され、600 冊を製本して、全国販売に充て、400 冊は自分で製本して、自坊の檀家 390 戸に頒布した。宗教学の集大成を目指した能海の中間での論文で、格調高い内容となっている。

(11).「口代」14 項目は、改訂版『チベット巡礼探検家　求法の師・能海寛』112―115P に掲載。

(12).「教界時言社」は、京都白川村に教界時言社を置き、清沢満之、今川覚神、稲葉昌丸、井上豊忠、月見覚了、清川円誠が結盟した、東本願寺の宗門(寺務)革新運動。白川村におかれたことから「白川党」と称された。

(13).「経緯同盟会」は、元々明治 23 年 1 月 19 日に普通教校出身者で結成して、古河勇を代表として活動していたものが、27 年 12 月に、「経緯会」として 28 名でスタートしたものである。古河は病魔に罹り後継は、北条太洋へと引き継がれた。その北条も外交官として洋行するため、6 月 12 日、能海が幹事となり送別会を開き、後継は西依一六にゆだねられた。経緯会の再興を図るため、30 年 8 月 19 日、会の名称を「経緯同盟会」に戻すための会是委員会を開き、臨時会で承認された。会員の拡充を図った。31 年 3 月に西依が代表を辞退し、後継に境野哲海、安藤弘らに委ね、同年 4 月には能海も結婚と西蔵行のため郷里に戻った。

(14).「思想の変遷」は、『能海寛師の深層心理を探る』(『石峰』第 15 号・2010.3.15)を参照されたい。

(15).「諭達」は、明治 32 年 12 月 23 日に草稿されたもので、大谷派管長から住職拝命を受けたことが記載されている。

(16).「一枚起請文」は、法然が弟子の源智に授けた一枚書きの遺言。自分の死後に於いて「念佛」について間違った解釈をしないよう書き残したもの。

【参考資料】

能海寛追憶会編『能海寛遺稿』(大正 6 年)
能海寛研究会編『能海寛著作集』全 15 巻 17 冊(2006 年～2010 年)
能海寛著『世界に於ける仏教徒』(明治 26 年)
『普通教校人士』(M23.11.12 刊)
『紫州東温譲追悼集』(M27.7.16 刊)
チベット探検家『求道の師　能海寛』(波佐文化協会・1989 年)
「『能海寛』西蔵探検行の源流を探る」(『石峰』第 11 号・2006.2.15)
改訂版・チベット巡礼探検家『求道の師　能海寛』(USS 出版・2009 年)
『能海寛師の深層心理を探る』(『石峰』第 15 号・2010.3.15)
『水野斉入宛て書簡(大正 6 年)を巡って』(『石峰』第 16 号・2011.3.15)
「能海寛の『新仏教徒』運動の軌跡」年表」(『石峰』第 20 号・2016.3.15)
『能海寛(石峰)古川勇(老川)の新仏教徒運動』(『石峰』第 23 号・2018.3.15)
新仏教徒運動の提唱者『求道の師　能海寛』(波佐文化協会・2018 年)
「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」(『石峰』第 24 号・2019.3.15)
「能海寛の生涯日録」(『石峰』第 25 号・2020.3.15)